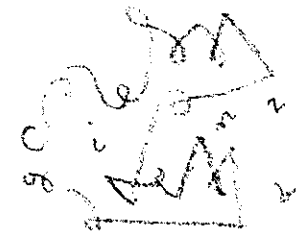
銀座の街のドレスコード

中島直人（なかじまなおと）
（東京大学准教授）



実は日ごろ、スーツを着たり、ネクタイを締めたりする機会はほとんどない。毎日、いってみれば普段着、平日も休日も同じ格好で過ごしている。オンもオフもなく、常に研究のことを考えていたいからだと力説してみたくもなるが、実際は単に面倒臭くて身近にある服をひょいっと着ているだけである。しかし、そんな私でも必ずスーツとネクタイを着用していく場所、場面がある。それは銀座でのまちづくりの会議やシンポジウムである。

銀座にはドレスコードがある。銀座はスーツとネクタイをスマートに着こなす人々の街である。スーツを着た人たちは、遠目には同質的だが、近くからは、スーツという型の中でいかに個性を発揮するか、いかにていねいに場や人に合わせるか、といった工夫、配慮が見て取れる。銀座の方々から学びたいことの第一である。

しかし、スーツもネクタイも人々の着こなしの話に留まらない。銀座の街並みもまた、洗練された「銀座らしさ」というコードを持っている。その「銀座らしさ」を担保するための仕組みが、都市計画法に基づいて建物の高さや道路からの後退距離、誘導用途などを定めた銀座地区計画と、中央区の要綱に基づき、質的な内容を協議しながら決めていく銀座デザイン協議会の二つである。

これをファッションになぞらえれば、前者ではスーツがスーツたる所以（ゆえん）の基本のパーツやプロポーションを事前確定的に数値で決めるのに対して、後者では、どのような柄、素材のスーツか、シャツやネクタイはどんなものか、全体として銀座らしいコーディネートになっているか

等々、話し合って決めるということになる。この両者が相まって、銀座らしい街並みをつくり出している。

もちろん、人々のファッションと建物が生み出す街並みとでは相違点がある。建物や街並みは否応なく多くの人々が目にするものだし、一度できるとそう簡単には変えることができないので、より公共性が大きく、慎重にならざるを得ないし、コードや着こなしがより大事になる。

いっぽうで、最近の街並みの美しさに関する議論では、生き生きとした人々の姿自体が街並みにとって重要であるという認識が前提となってきている。つまり建物などがつくりだす街並みは背景に退いて、前景に人々のアクティビティが出てきている。近年、公園や広場、街路が、人々の居場所として再認識され、その使い方がより自由になってきている。どこまでも青い芝生、カラフルなビストロチェアー、オーガニックなフード、そして人々の楽しそうなたたずまい。

ここでも、そもそも銀座の街並みは、アクティビティと常にセットであったことを思い出しておきたい。つまり、「銀ぶら」という行動が、銀座らしさの根源として語られてきた。ほかのまちで、そうした例を聞いたことはない。銀座は、人々のアクティビティと美しい街並みとが鏡のようなショーウインドーにともに映り込む、すてきな世界をつくり上げてきた。

ところで、銀座にはこれまでも多くの建築家や都市計画家が関わってきた。とりわけ、東京の戦災復興計画の立案責任者として知られる石川栄耀の関与は深い。最近、私の研究室で博士号をとった宮下貴裕氏は、石川が銀座通連合会と長年つき合い、さまざまな助言を行ったことを明らかにした。その石川は街並み、都市美に関して独自の思想の持ち主であった。

石川も街並みをファッションになぞらえた。石川は、都市美の規範が欧米都市に見られるシビックセンター的な美に偏っていると批判し、そうした都市美を「大礼服」と呼んだ。その上で、「ユカタや、開襟シャツの軽快さが、邪道視され易い。それは實に世の中の『味ひ』を無くすのみならず、泣かんで好い人を泣かす。實に下らない。それに抗議し度いのです」と語った（「都市美と広告の関係」『広告研究 昭和十四年版』、一九三九年）。

なるほど、一理ある。私たちが好むのは、美しく整った街だけではな

い。むしろ、風通しがよく、しかし味わい深い奥の感じられる街もあるだろう。商いが支えている銀座の街並みは大礼服とは全然違うけれども、スーツとネクタイの他に、浴衣や開襟シャツがあるのだろうか。

銀座通りはぴしっと着こなされたスーツとネクタイが似合うが、しばらく歩いていると、隙間がいくつも空いていることに気づく。その一つが路地である。銀座八丁のしっかりしたグリッドの都市構造によい意味でノイズをもたらすのが路地である。

路地は銀座通りの背後に広がっている多様な通り、リラックスした雰囲気の飲食店などが集積する界隈への入り口でもある。そこではヒューマンスケールがさらに親密度を増し、心は解放される。以前、私の研究室で調査したところ、銀座のカフェの多くは、銀座通りではなく、少々裏側の界隈に立地していた。

さて、街並みの中のもう一つの隙間は、近年の大規模改修や再開発によって新たに生み出されたパブリックスペースである。壁面の揃った建物と道行く人々とがショーウインドーを介して関係するのが銀座であったが、それは物理的にも心理的にも一種の緊張関係を伴っていた。公園や小広場がほとんどない銀座で、その緊張を、そして歩き疲れをほぐすためにあったカフェは奥に引っ込んでいる。そうした中で、開放的でゆっくりと無料で休むことができる都市空間の価値は大きなものがある。

たとえば、銀座三越のテラスガーデン、東急プラザ銀座のキリコテラス、銀座シックスの三原テラス。たまたまなのか、共通して「テラス」という名称を持つ。一段高くて、街の喧騒からは少し切り離された公共的空間という意味なのだろう。しかし、これらはビルの屋上であったりして、地上からあまりに遠い。グランドレベルとの近接性が増したとき、これらの都市空間は、銀座に浴衣や開襟シャツにも似たほんとうの軽快さや味わいをもたらしてくれるだろう。

なお、宮下氏は銀座で仕事をする石川の写真を何枚か見つけた。それらを見せてもらったが、写っていたのは浴衣姿や開襟シャツの姿の石川ではなかった。しっかりスーツにネクタイを締めている石川であった。